

(鹿屋市王子町王子・下祓川町小原)

位置と環境

遺跡は、市街地の北東へ約2kmにあり、北東に広がる標高約72mの笠野原台地北西縁辺部に所在する。

本遺跡の北・南・東の三方は、南九州特有のシラス台地が広範囲に続くが、西側は高隈山地に源を発する肝属川により約40mの懸崖となっている。

眼下は、谷底平野で水田となり、近年は宅地化が進み市街地へと続いている。市街地は、肝属川が解析した狭隘な河谷沖積地に開かれている。

調査の経緯

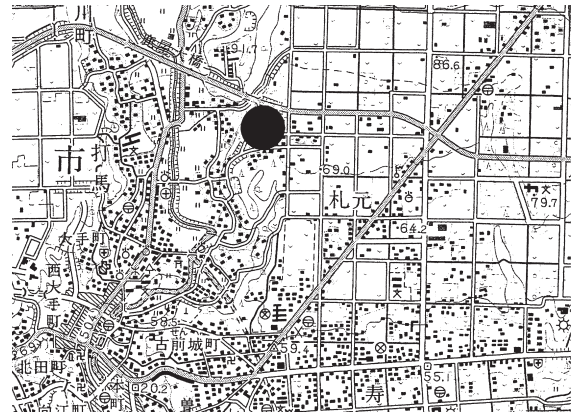
本遺跡は、昭和54年(1979)11月6日に県教育委員会による大隅地区埋蔵文化財分布調査によって発見された弥生時代の遺跡で、一般国道220号鹿屋バイパスの路線が決定し、事業着手後に発見された。

調査は、鹿屋バイパス建設に伴って建設省、大隅工事事務所(現、国土交通省大隅河川国道事務所)の依頼を受けた県教育委員会により、昭和56年から3か年間にわたり本調査が行われた。

確認調査の結果、本遺跡は学術的見地から南九州の弥生時代を知る上で貴重な手がかりを与える遺跡として注目された。

その後、本調査はバイパス工事にかかる道路建設予定地幅の南北約35~55m、東西250mの範囲で、約11,000m²を対象に調査が行われた。

本遺跡は、縄文時代早期と弥生時代の包含層とが確認され、そのほとんどの範囲で弥生時代中期末か



第1図 王子遺跡の位置

ら後期初頭にかけての大規模な集落跡であることがわかった。さらに、数々の重要な資料などが発見され、県内のみでなく広く全国的な関心を呼び、その保存策についてもいろいろ議論された。

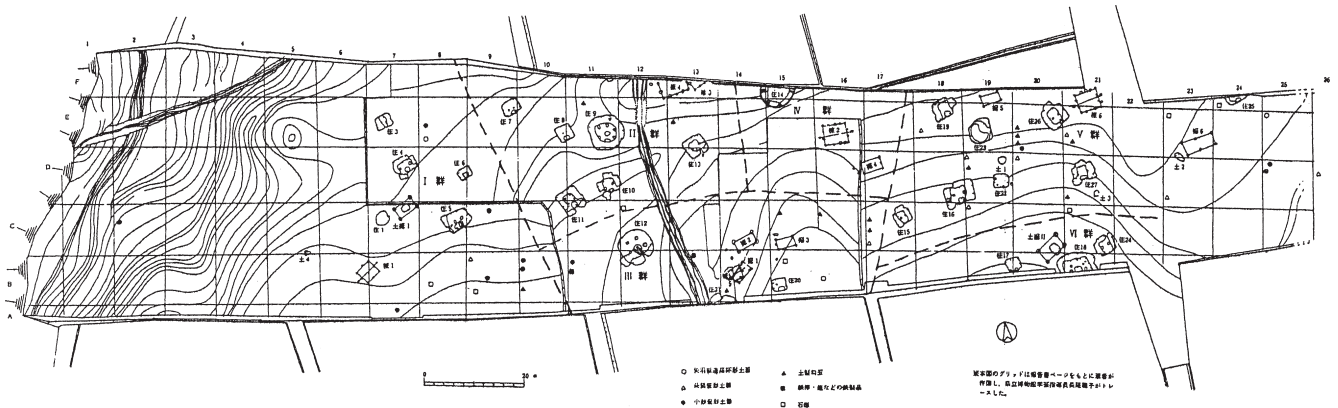
遺構と遺物

縄文時代早期では、調査区の約200m²の範囲で、集石遺構1基を検出した。この集石は、長径90cm、短径80cmの規模で、石材に安山岩を用い、集石の表面には炭がタール状に付着していた。

遺物では、貝殻条痕を綾杉状に施した石坂式土器の少破片少量が出土したのみである。

弥生時代の遺構では、竪穴住居跡27軒、掘立柱建物跡14棟(棟持柱をもつもの6棟、掘立柱に土坑をもつもの2棟を含む)、土坑4基、溝状遺構2条などを検出した。なお、竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡2棟、溝状遺構などの一部が鹿屋バイパス建設の予定地外へ延びている。

竪穴住居跡27軒の掘り方は、その形状によって区



第2図 王子遺跡の検出遺構配置図

分すれば、その平面形が方形と円形に分けられ、方形を基本にしていると見られるもの19軒、円形を基本にしていると見られるもの4軒、方形を基本とするが四隅に丸味がある隅丸方形のもの1軒、不詳3軒に大別できる。

方形を基本としている形状の住居跡は、上屋を支えるための支柱穴2本と中央南側壁際に設けられた土坑からなっている。

しかし、方形の四隅のコーナーを円く潰した隅丸方形住居跡、方形の形状で外側に張り出し部を設けたもの、床面から一段高く造られた「ベッド状遺構」の張り出し部を設けた住居跡など、さまざまな形状のものがあった。

中には、「ベッド状遺構」の壁際や床面の壁際などに湿気抜きや排水などの用途が考えられる溝を廻らしたり、床面に掘込まれた浅い窪みをもつものなどもあった。

これらの住居跡は、掘り方の形状・規模・ベッド状遺構などや出土遺物などから、方形住居跡では、4・11・16・26・27号竪穴住居跡の5軒、円形住居は、9・12・14号竪穴住居跡の3軒、隅丸方形竪穴住居跡は18号の1軒の9軒が特に注目される。

掘立柱建物跡は、桁行・梁行ともに掘立柱で、さらに妻側に独立して棟木を支える棟持柱をもつもの（棟持柱付）、1間×1間と2間×1間のもの、四本の掘立柱の中央に土坑をもつものなどがある。

棟持柱付掘立柱建物跡は、規模が最も小さいもので、2間×2間のもの1棟、3間×3間のもの1棟、3間×4間のもの2棟、4間×3間のもの1棟、不明なもの（路線外）1棟、掘立柱建物跡で、1間×1間ものは5棟、2間×1間のもの1棟、4本の掘立柱の中央に土坑を伴うもの2棟を検出し、用途については総柱建物でないために高床構造は考えにくいとの意見や高床倉庫とする考え方などある。

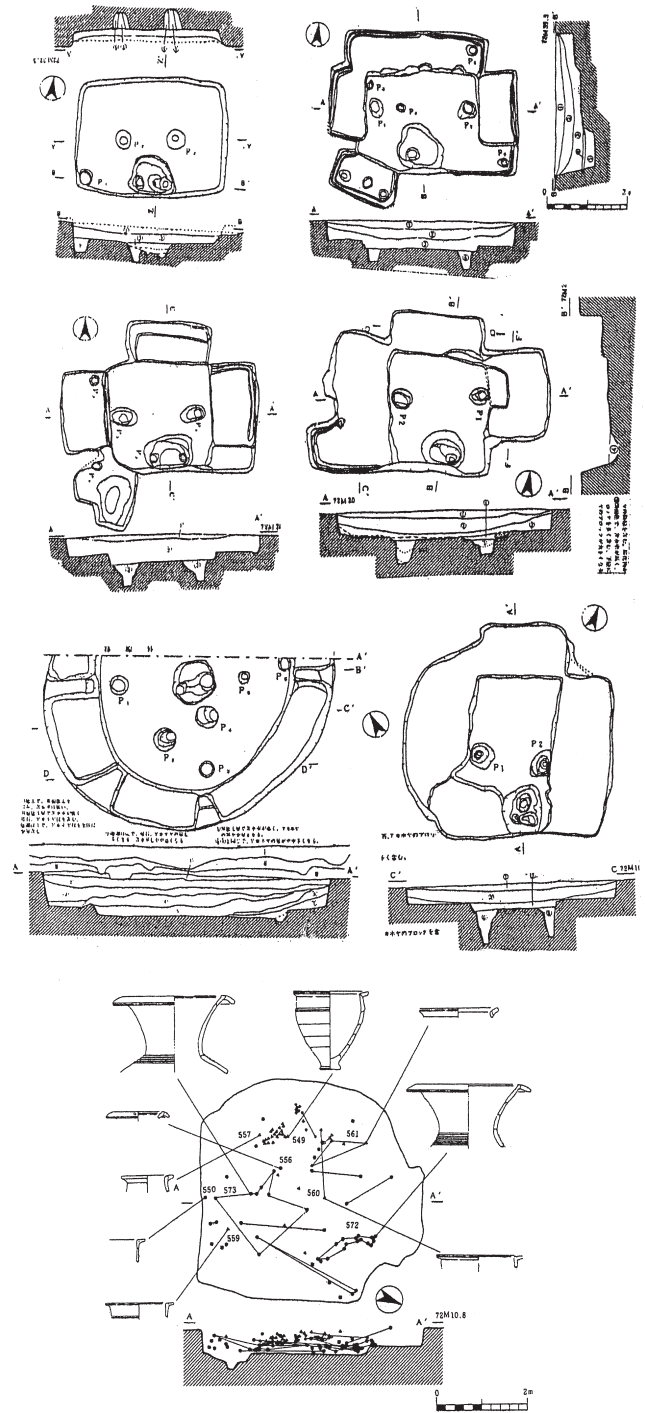
土坑は、その形状から隅丸長方形、楕円形を平形状とし、掘込が深いものと浅いものを検出した。

これらの土坑の埋土中から在地系をはじめ北九州系及び瀬戸内系などの土器（大型甕形・甕形・壺形・鉢形・高坏形土器）、石器には、樹皮布叩き石、砥石などのほか軽石の集積も検出した。これらの土坑は、

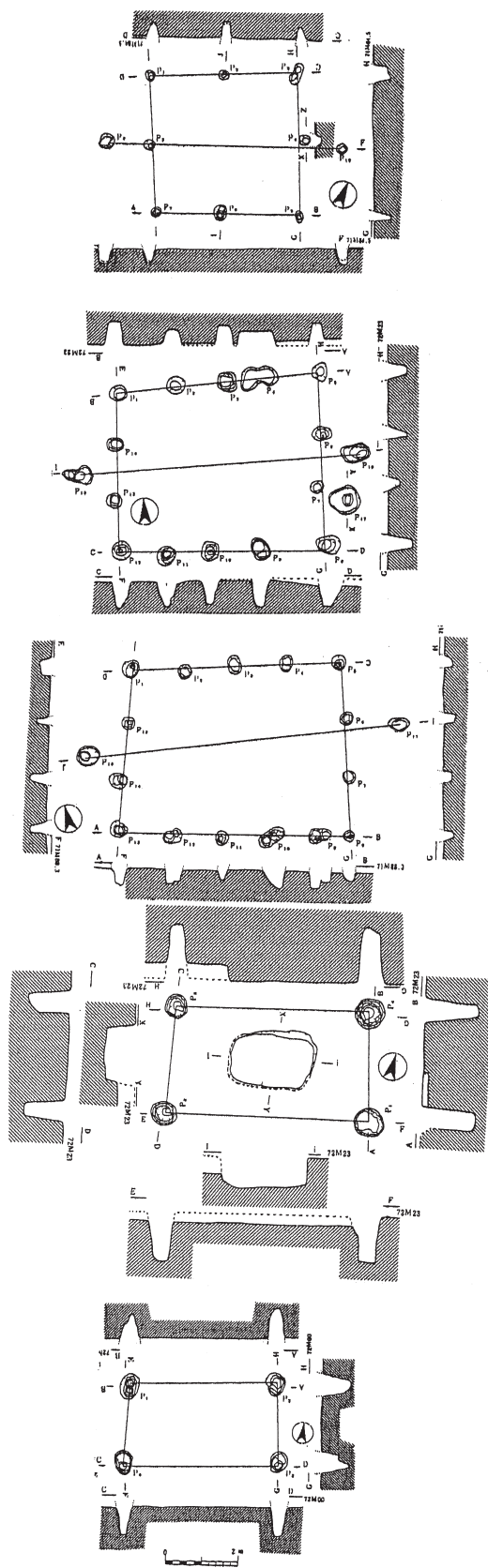
貯蔵穴とする考え方が支配的であった。

溝状遺構は、遺跡の西側端部を斜めに横断する溝で掘込みが深く、断面形がU字状をなすものと、中央部を縦断する溝で、2つの溝が重複し、一つの溝は床面が硬く踏みしめられたものと、掘り込みはあまり深くはない溝が検出されている。

弥生時代の遺物では、大型甕形土器・甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏形土器などの土器をはじめ



第3図 王子遺跡竪穴住居跡実測図



第4図 王子遺跡掘立柱建物跡実測図

め、磨製石鏃・打製石鏃・棒状敲石・扁平大型打製石器・砥石・打製石器・磨石兼凹石・樹皮布敲石などの石器，鉄製の鉋・刀子・鉄滓などの鉄製品，大小の土製勾玉や軽石製品などが出土している。

弥生時代の土器は，大半が在地の土器で，中期後葉から後期初頭の山ノ口式土器である。このほか，北部九州や東九州の影響を受けたもの，畿内の土器を祖形とした瀬戸内系のものや，その影響を受けたものなどが共伴して出土した。

北部九州系の土器は，須玖式土器などがあり，壺形土器に影響を受けたものが多くみられ，東九州のものは，下条式土器などがある。一方，瀬戸内系土器は，凹線文をもつ土器，篋状工具による列点文を施している土器，矢羽根透しをもつ高坏形土器などがある。また，山ノ口式土器の甕形土器や壺形土器に櫛描文を施したものがあり，畿内系文化が流入定着していたことが知られる。

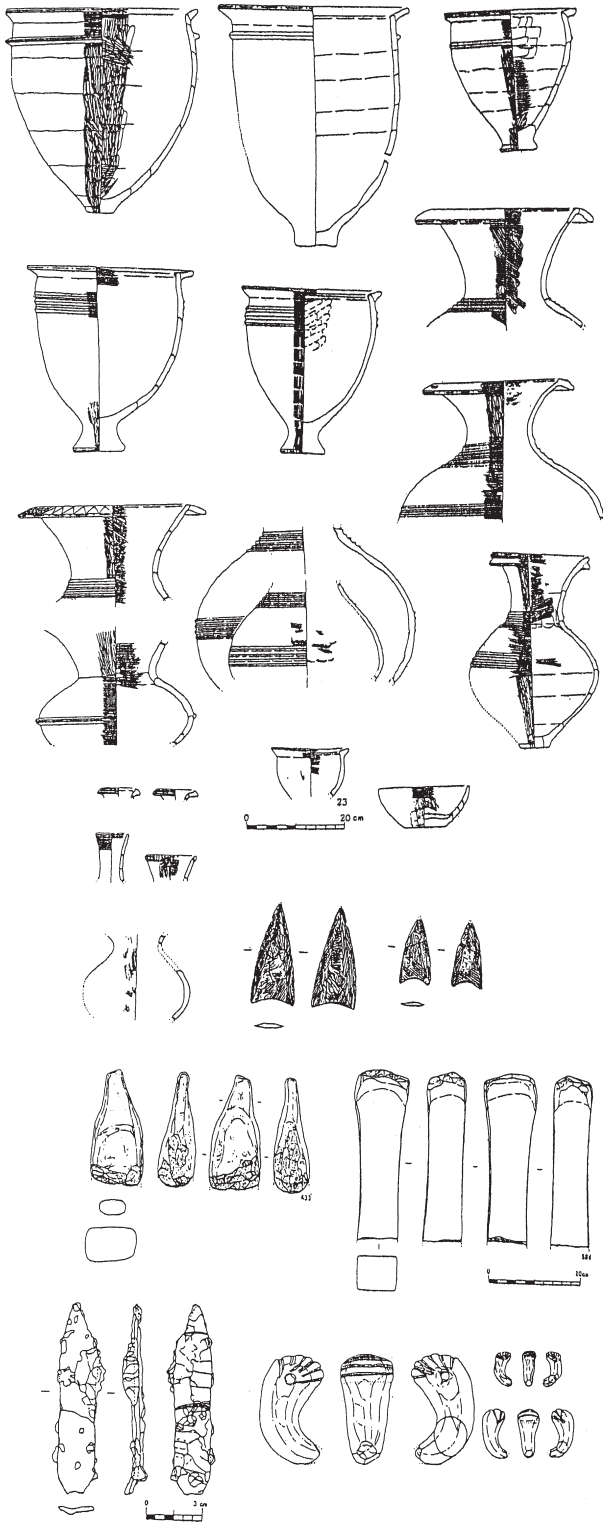
石器のうち，9号住居跡内から未製品を含めて多くの磨製石鏃が出土し，工房跡との考え方が示された。このほか，照葉樹林帯で用いられ，木の真皮や植物から繊維をとるための道具といわれる樹皮布敲石4本が出土し，例が少なく注目された。

土製品としては，大小13個の土製勾玉や粘土を捏ねた状態のものなどが出土している。勾玉のほとんどは丁字頭をもつものが多い。特に，大型のものは，赤褐色に着色してあって，祭祀用に用いられたと考えられている。しかし，本遺跡からは祭祀がみられるような場所や遺構は発見されていない。

これらの遺物のほか，鉋・刀子・鉄滓などの鉄製品などの出土があった。中でも，加工用具としての鉋が出土している。この道具は，鉋が出現する前の大工道具の一つである。この遺跡の鉋は，吉ヶ浦型鉋と分析の結果が報告されている。一方，鉄の加工技術を持っていたことを示す鍛冶滓（鉄かす）も出土している。この鍛冶滓は，朝鮮半島で製鉄され，輸入されたものが利器として，この地で作られたのではないかとする考え方もある。

特徴

本遺跡は，大規模な集落遺跡で学術的見地から古代の南九州を知り得る貴重な遺跡として，保存が提



第5図 王子遺跡の出土遺物実測図



写真1 王子遺跡の竪穴住居跡遠景及び近景

起されるなど注目を集めた。特に、ベッド状張り出しをもつ住居跡や掘立柱建物跡、棟持柱付掘立柱建物跡、土坑をもつ掘立柱建物跡などの遺構は、南九州を含めた九州地方の弥生時代の集落構造を知る上で、考古学研究者のみならず建築学研究者にも学問上で多くの指針を与えた。

一方、本遺跡出土の遺物では、在地の山ノ口式土器と瀬戸内系や北九州の土器などの相伴関係は、弥生時代の文化圏や交流状況を考えるための重要な資料とされている。

資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターと市教育委員会に保管され、一部は王子遺跡展示館に展示されている。

参考文献

鹿児島県教育委員会1985「王子遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』34

(立神次郎)